



えと文

今井 憲一

瓦と貝がら

一個の破片となつて了つた丸瓦も、もとは人間を風雨からまもるために、形造られたものである。幾世紀かの風雪に耐えてきたことであるが、砕け散つたあとにおいても、未だ往時の人工の跡をとどめている。

そこに刻まれた紋章の菊花は、その花卉の数に応じて、それぞれの家系の格式を誇つた、人間の歴史を物語っている。

今は命なき貝がらを拾つて見ても、かくフォルムが形成されるまでの間の、永い神秘的な種の物語があり、歴史の夢を、見知らぬ海底の世界にまで、いざなつて行く魅力がある。いづれも、物言わぬ静かな世界である。

言葉を発明したばかりでなく、音響の再生機まで使用する現代の世相は、これと思ひ合せて、何とかまびすしい事であろう。人間は、あまりにも鈍舌になり過ぎたようだ。

(京都市立美大教授・独立美術会員)